

インターアクションにおける日本の共食文化と言語

カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校
准教授 小池千里

近年、孤食が社会問題として挙げられ、共食-「誰かと食事を共にする（共有する）こと」の大切さが重要視されて来ているが（足立，2010 等）、大人社会では家族だけでなく友人や同僚との共食も大切な社会的活動の一つだと言える。本研究では、友人や同僚との共食の場面で会話の参加者がどのようなインターアクションを行っているかについて、特に「食べ物を分け合う」という行動に焦点を置き、1)「なわ張り」、2)「ウチ」と「ソト」、そして3)領域の3つの観点から言語・非言語行動を分析する。

神尾（1990，1994，2002 等）は「情報のなわ張り」理論で、話し手と聞き手のある情報に対する認識度に基づいて、情報が「なわ張り内」か「なわ張り外」か判断され、それによって適切な発話の文末形式（例えば「ね」「らしい」「そうだ」等）が使用されると提唱している。この「内と外」という概念は言語と文化の分野で多岐に渡って研究されて来ているが（Quinn，1994 等）、その中でも言語と食と空間に関して牧野（1996）は、日本人は「同じものを食べて、同じ味を味わいながら、談笑することにより、ウチ意識を高めよう」とすると指摘している（p. 30）。しかしながら、実際のインターアクションの中でのなわ張り（Hayano，2013；Heritage，2012 等）やウチとソトの概念に関しての研究はまだ少なく、これらの非言語行動の側面に関してもまだ分析の余地がある。本研究では日本語母語話者の自然な会話のビデオデータを用いて、情報と物のなわ張りとウチとソトという観点から、参加者がどのような言語・非言語行動を取りながら共食をしているかについて考察することを試みる。

分析の結果、まず、共食の場面で参加者は、話し手聞き手の食べている物に関する情報の認識だけでなく、食べ物の場の個人領域(private domain)と公共領域(public domain)、共有している食べ物と共有していない食べ物、について認識しながら共食というアクティビティーを行っていることがわかった。また、この個人領域と公共領域というのは一定の決まったスペースではなく、共食をしながらインターアクションの中で絶えず流動的に変わっていくものであるということもわかった。次に、共食の場面では共有の食べ物だけでなく、個人の食べ物も分け合って食べることがあるが、どちらの場合も食べ物を勧める話し手は他の参加者が食べ物を共有しやすいように、また、共有の食べ物を食べている場合では参加者みんなが平等に分け合って食べられるように、という配慮を表す言語表現、非言語行動が観察された。最後に、共食の場で食べ物以外のアクティビティー（例えばストーリーテリング等）に会話の焦点がある場合、会話の参加者はそのアクティビティーを中断しないようにしながら食べ物を分け合うという行動が見られた。

共食の意義は、食べている食事そのものよりも、一緒に食べている相手と相互作用を持つことにあるが、特に、同じ食べ物を一緒に分け合って食べながら歓談することによって、

より一層その効果がもたらされると思われる。本研究で指摘したように、この共食のアクティビティーでは、個人領域、公共領域のある共食の場で、どのような言語表現、非言語行動を使って、いかに食べ物を分け合って食べるかが重要な点である。集団社会のメンバーは、インターアクションの中で効果的な言語・非言語行動を用いながら協力的に分け合って食べるにより、よりよいウチ関係を築いていくことができるのではないだろうか。

参考文献

- 足立己幸 (2010) 「家族と “食を共にすること” 共食の大切さ」『親子のための食育読本』 pp. 13-21 内閣府食育推進室発行.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』 東京：大修館書店.
- (2002) 『続・情報のなわ張り理論』 東京：大修館書店.
- 牧野成一 (1996) 『ウチとソトの言語文化学-文法を文化で切る』 東京：アルク.
- Hayano, K. (2013). *Territories of knowledge in Japanese conversation* (Doctoral thesis, Radboud University, Nijmegen).
- Heritage, J. (2012). Epistemics in action: Action formation and territories of knowledge. *Research on Language & Social Interaction*, 45(1), 1-29.
- Kamio, A. (1994). The theory of territory of information: The case of Japanese. *Journal of Pragmatics*, 21, 67-100.
- Quinn, C. J. (1994). The terms *uchi* and *soto* as windows on a world. In J. M. Bachnik & C. J. Quinn (Eds.), *Situated meaning: Inside and outside in Japanese self, society, and language* (pp. 38-72). Princeton, NJ: Princeton University Press.